

朝鮮民主主義人民共和国

望まれる朝・日スポーツ交流

白宗元

一八九五年二月、李朝政府はひとつの公文書を出したが、それは「安逸を貪らず筋肉と骨格を丈夫にし、以って壮健無病の喜びを享受すべし」という内容で、教育に新式体操科目を取り入れることであつた。

クーベルタンの提唱でギリシアのアテネで第一回オリンピック大会が開催されるのは一八九六年であつた。間もなくオリンピックが開かれる世界の時流からはあまりにもかけ離れている感もあるが、朝鮮における近代スポーツはここから始まったといえよう。

●受難のスポーツ

朝鮮における近代スポーツの歩みは植民地時代と解放以後の時期に大別できる。植民地時代の朝鮮のスポーツは一言で受難の時期にあつた。

一九一〇年の「韓日合併」に

よつて、朝鮮は日本の完全な植民地となり朝鮮総督府は「武断政治」を行つた。日本人教員がサーベルをさげ軍服姿で授業をしたのはこの時期であるが、学校では徒手操と野球しか許さず財政難を理由に運動会は禁止された。

朝鮮の民衆が独立を要求して全国的に立ち上がつて闘つた一九一九年の「三・一運動」後、総督府は「武断政治」を一部緩めざるをえなかつた。スポーツに関しても統制が緩和され、一九二〇年代に入ると朝鮮体育会が初めて結成され、バスケット協会、ボクシング協会、野球審判協会、朝鮮相撲協会、蹴球審判協会などが後に続いた。

学校中心であつたスポーツは次第に社会的に普及していった。なかでもサッカーは早くから青年や市民の人気を集めたが、この当時ひとつの驚くべきことがあつた。

一九二九年九月に日本代表サッ

カーチームと延禧専門学校（現在の延世大学）の対戦が行われた。日本代表は上海で開催された第八回極東選手権大会に参加し準優勝した帰途での競技であつたが、日本代表チームが四対〇の大差で敗れたのである。

これを契機に朝鮮のサッカー熱は高まり、最初の都市対抗戦である京平戦（ソウル、ピョンヤン）が実現して全国的に人気が沸騰した。しかし満州事変の勃発した一九三〇年代以降スポーツの軍事化とともにスポーツに対する締めつけが再び始まつた。まず朝鮮のスポーツを代表する朝鮮体育会が一九三八年に解散させられた。続いて九〇余の朝鮮人スポーツ団体もすべて総督府の統制下に統合され、伝統の中等学校サッカーリーグ戦は一九四一年から開催できなくなつた。しかし、こうしたスポーツ受難の時期にも一九三六年の第

一回ベルリン・オリンピックのマラソンで孫基禎選手は二時間二十九分一秒二のオリンピック新記録で優勝し、三位も南昇竜選手が占める快挙をなした。けた。

一九四六年一〇月にピョンヤン高等

一回ベルリン・オリンピックのマラソンで孫基禎選手は二時間二十九分一秒二のオリンピック新記録で優勝し、三位も南昇竜選手が占める快挙をなした。けた。

●チュチュエのスポーツ

植民地支配から解放された一九四五年八月当時、朝鮮のスポーツ事情は困難を極めていた。運動場はピョンヤンにしかなく、スポーツ器具を製造する工場も、スポーツ指導者を養成する教育機関もなかつた。一九四五年一月一日に北朝鮮体育同盟（四八年に中央体育指導委員会に改編）が結成され、一九四六年一〇月六日、初めて開かれた体育人大会で金日成將軍は「体育を大衆化するため」という重要な演説を行つた。一部の選手、少数の人々や商業化のためではなく、体育を大衆化、日常化し、広く大衆のなかに普及してこそ人々の健康を増進させ、新しい国造りに積極的に参加させることができる」と述べた。金日成將軍の演説は、新生朝鮮のスポーツがとるべき基本的な進路を示すものであつた。

体育選手の養成に関しては、一九四六年一〇月にピョンヤン高等

師範学校（後の教員大学）に体育科が設けられ、一九四八年には新義州教員大学と海州教員大学にも体育科が設置されて体育指導教員の養成が始まった。しかし、一九五〇年に勃発した朝鮮戦争は、解放後ようやく発展しはじめた朝鮮のスポーツを根底から破壊した。戦争が終わった時、全国土が廃墟と化した朝鮮で、スポーツはそこそゼロから出発しなければならなかった。さらに、当時、スポーツの分野では「朝鮮人の体格では西洋人とどうい勝てない」とか「先進国のスポーツ技術は高くわれわれは劣っている」といった風潮があった。このため朝鮮の具体的な実情や条件をかえりみず、無批判的に先進国スポーツの模倣をする傾向があらわれていた。

朝鮮戦争後、経済の復興に並行して、体育施設も新設され、大衆体育の普及、体育選手の育成が進められた。それとともに、朝鮮人の身体的条件や機能などが細密に分析されて朝鮮人の特性と実情に適したチュチュエ（主体）のスポーツが確立されていった。一九五四年春には戦後初の中央体育大会が開かれた。六月に内閣直属の体育指導委員会が組織され、一九

五五年には各職場、学校、都市、農村で体育団が組織された。一九五八年に各地に青少年スポーツ学校が設置され、ピョンヤン師範大学体育学部と新義州教員大学体育学科を統合してピョンヤン体育大学（後に、朝鮮体育大学に改称）が設立された。一九五九年には、各道に短期体育幹部養成所が設けられるとともに、ピョンヤンに体育科学研究所と中央体育医療所が設置され、国家総合体育団が発足した。

●世界の舞台で活躍

スポーツは本来インターナショナルなもので、平和な環境のなかでこそ発展するものである。しかし、朝鮮をとりまく情勢は厳しく、世界スポーツへの参加、国際スポーツ機構加盟などの活動が始まるのは一九五〇年代の後半からである。最初の国際機構加盟は一九五六年の国際バレーボール連盟への加盟であるが、六〇年代末までには主要な国際機構のほとんどに加盟した。この時期はまた、朝鮮のスポーツが国際舞台で花開く時代でもあった。

一九六三年、インドネシアのジャカルタで開かれた第一回新興

国競技大会（ガネフォ）に参加した朝鮮選手団はマラソン、ボクシングなどで八つの金メダルと一四三のメダルを大量にちとった。なかでも、二五歳の辛金丹選手は女子四〇〇メートル競走で五秒四を、八〇〇メートルでは史上初めて二分台を切る一分五二秒一の驚くべき世界新記録をたて、新興朝鮮のスポーツの力を示した。辛金丹選手はもともと熙川工作機械工場で働く旋盤工であった。陸上競技での才能が認められ、一九五八年には陸上選手となり、後には、体育家として最高の称号である「人民体育人」を授与されている。

一九六四年一月、オーストリアのインスブルックで開かれた第九回冬季オリンピック大会に初参加した二二歳の韓弼花選手が三〇〇メートルスピードで銀メダルを取ったが、これまたアジアの女性としては初めてであった。

韓弼花選手は、高等中学校卒業後、牡丹峰体育選手団（後、ピョンヤン市体育選手団）の選手となり、朝鮮体育大学を経て、ピョンヤン市体育選手団スピードスケート監督となった。後、体育技術連盟の副委員長、最高人民会議代議

員（国会議員）にもなった。

卓球も確実に世界トップレベルに達した。一九七五年にインドのカルカッタ（現コルカタ）で開かれた第三三回世界卓球選手権大会に出場した一八歳の朴英順選手は旧ソ連、中国の並みいる強者を退けて女子シングルスで優勝し、前例のない「世界卓球女王」の称号と王冠を送られた。朴英順選手は一九七七年にイギリスのバーミンガムで開かれた第三四回の同大会でも女王の座をひき続き確保した。

国際スポーツで立派な成果をあげている朝鮮が国際オリンピック委員会（IOC）の正式メンバーになるのは一九六三年で、オリンピック大会に初めて選手団を送ったのは一九七二年の第二〇回ミュンヘン大会からである。この大会で朝鮮はライフル射撃で世界新記録をたて金メダルに輝いた。さらにボクシング、ウエイトリフティングで銀、柔道、女子バレーボールでそれぞれ銅メダルをとり、予想を超える成果をあげた。一九九二年にスペインのバルセロナで開かれた第二五回オリンピック大会には一種目の競技に一〇四名の選手団が参加した。私も朝鮮オリンピック委員会の副委員長として

選手村入りしたが、朝鮮選手団の活躍は世界の注目を引いた。

一度オリンピックに参加しないと世界のレベルから五、六年はおくれるといわれるが、一二年ぶりに参加した朝鮮は機械体操の鞍馬で金メダル、レスリングフリースタイル、ボクシングで、計四個の金メダルを取り、朝鮮の底力を世界にアピールした。

朝鮮が世界のスポーツ舞台で収めた数々の成果のなかでも、一九六六年のロンドン第八回世界サッカー選手権大会（現在のFIFAワールドカップ）における目覚ましい活躍と一九九一年の日本で開かれた世界卓球選手権大会に統一チームとして出場し女子団体戦で優勝した栄光は朝鮮スポーツの歴史に特筆される出来事であった。

世界サッカー選手権大会に参加するためロンドン空港に降り立った朝鮮チームに対する評価は極めて低かった。初参加した体格の小さなアジアのこのチームが間もなく世界を驚嘆させ、サッカー史上に一大センセーションを巻き起こすことになろうとは誰も想像できなかった。

南米の強豪チリと引き分けて決勝リーグに進んだ朝鮮チームは

ヨーロッパサッカーの名門、優勝候補と目されたイタリアと対戦した。全員攻撃、全員防御の果敢なスピード攻撃をくりひろげ、イタリアが絶対の自信をもっていた「コンクリート・デフェンス」を突破した朝鮮チームは、一対〇で勝った。朝鮮はアジアで初めて世界サッカー八強入りの快挙をなしたのであった。

千葉県幕張で開かれた第四回世界卓球選手権大会は、四六年間の分断の歴史で初めて「統一コア」チームとして出場した記念すべき場となった。

私たち体育関係者や在日朝鮮人は、統一チームの結成を喜ぶ一方で不安も大きかった。「練習方法や生活も違う南北チームがうまく溶け合い、成果をあげられるだろうか……。」しかしそれはとりこし苦労だった。私は時々練習を覗いたが、統一チームの和気藹々とした雰囲気は自信に満ちた頼もしいものであった。

決勝の相手となった中国女子チームは、一六年間、不敗を誇ってきた「世界卓球の女王」である。いよいよ決勝をさめるシングル戦には北の兪順福選手が出場した。白熱した試合はついに二〇対一九

の接戦となり後一点を残すのみとなった。満場注視のなかで中国選手の手打ちこんだ最後の一球は台を大きく外れた。統一チームがついに世界最強の中国チームを制した。会場に「マンセ」（万歳）の大歓声が起こり、応援の統一旗は激しく波打った。この歴史的な南北スポーツの統一は、二〇〇〇年のシドニーオリンピックにおける感動的な南北合同の開会入場行進に受け継がれていった。

朝鮮は一九九五年以降未曾有の大水害と日照りが続き、筆舌に尽くしがたい食糧難やエネルギー難にみまわれた「苦難の行軍」の時代に入った。そのなかでスポーツは朝鮮の民衆に希望を与えた。一九九六年のアメリカ・アトランタでの第二六回オリンピック大会では、女子柔道四八キロ級で一六歳のケ・スンヒ選手が世界の強豪を次々に倒していった。そして最後に、金メダルが間違いのないわ

れていた日本の選手に勝ったのである。これには、南北の朝鮮人が歓喜しただけでなく、世界の柔道界が驚愕した。一九九九年のスペイン・セビリアでの第七回世界陸上競技選手権大会での女子マラソンで、二五歳のチョン・ソンオク

選手が金メダルを勝ち取ったときも同様である。

ケ・スンヒ選手は課外体育学校（旧・青少年スポーツ学校）で選手となり、国家体育委員会青少年総合訓練所で訓練を積んだ。朝鮮体育大学を経て牡丹峰体育団の柔道監督になっている。牡丹峰体育団からは二〇一二年のロンドン・オリンピック女子柔道五二キロ級金メダリストのアン・クメが出ている。チョン・ソンオク選手は海州市体育学院の出身で一九九二年から人民保安省（警察に相当）の鴨緑江体育選手団に所属している。

●スポーツ施設の整備

ピョンヤンの金日成競技場（旧・牡丹峰競技場）は収容能力が一〇万人、ギネスブックの記録にも登録された華麗なマスゲームが行われることで世界的に有名である。

二〇一四年に大改装を終えたピョンヤン体育館は、一九七九年に第三七回世界卓球選手権大会が開かれて日本選手団も参加しているのによく知られているが、二万席の屋内競技場では一八種目の国際競技を行うことができる。

最大の施設は五月一日競技場で



15万人を収容する5月1日競技場（朝鮮通信社提供）



金日成競技場でのサッカー親善交流（右側が日本体育大学、写真提供：日本体育大学）

ある。大同江中州の風光明媚な綾羅島にある一五万人収容のこの競技場にはプール、マッサージ室、報道工丁関係などの諸施設とともに各種目の練習場が完備されている。巨大な競技場の入退場や交通整理の円滑を図るため、対岸の山腹にトンネルがつくられ、六車線の橋がかけられた。二〇一三年から二〇一四年にかけて改装工事が行われた。

ピョンヤンの中心部から少し離れた丘陵地帯に総合的なスポーツ基地として青年通り体育村がある。ここは一九八八年に建設された。総敷地面積一七五万平方メートルで後樂園グラウンドの一三〇余個分にあたるが、ここには水泳、卓球など一〇の専門的な屋内競技場と野外競技場、選手宿泊用のホテルが集中している。

●朝・日スポーツ交流と求められる平和な環境

一九九一年の南北統一チームの日本入国を実現するうえで世界卓球連盟の荻村伊智朗会長の尽力は大きかった。荻村会長は何度も南北を往復し、統一チームの来日後も宿所や練習場まで細心に配慮した。統一チームが優勝したとき、本来ならば金メダルは選手と監督だけに与えるのであるが、国際卓球連盟は統一チームの栄誉をたたえて北と南のコーチにも金メダルを授与する特例の処置をとった。

この一九九〇年代は朝鮮と日本とのスポーツ交流が非常に盛んに行われた時期でもあった。ボート、カヌー、クロスカントリイ、駅伝など多彩な種目で活発な交流が行われ、多い時には年間二二〇余名の朝鮮選手が来日した。

スポーツ分野で朝・日の交流が始まるのは一九七一年、故山口久太氏を団長とする体育代表団が朝鮮側の招待を受けてピョンヤンを訪問したときからである。せっかく盛んになったスポーツ交流が近年、断絶状態になっているのはまことに残念なことであるが、幸い二〇一二年から松浪健四郎理事長（元衆院議員）を団長とする日本体育大学チームが二年連続ピョンヤンを訪れ市民の大歓迎を受けた。

初めて朝鮮を訪れた学生たちは日本のマスコミが伝える朝鮮と自分の目でみる現実があまりにも違うのに驚くとともに「朝鮮をもっと知りたい」「また行きたい」と率直な感想をのべている。スポーツ交流の気運が再び高まってきたのは喜ばしいことである。

「スポーツは万国共通の言語」ともいわれる。朝・日間の相互理解を深めるためにもスポーツ交流が速やかに回復することが望まれる。金正恩第一書記は人民生活の向上、経済建設とともにスポーツにおいても世界のトップレベルに到達するべきであると強調した。スポーツの振興にひき続き国家的な力が向けられ、二〇一四年には東海側の馬息嶺に国際的なスキー場、

ピョンヤン市内に大遊泳場と郊外的美林に乗馬クラブが新たに開かれた。地方都市でもこれにならってスポーツ施設の建設が活発に進められている。また、二〇一三年のソウルでの東アジア女子サッカー競技大会、二〇一四年の仁川の第一七回アジア競技大会にも参加するなど、南北対立にもスポーツ交流で風穴を開ける努力は続けられている。

一方で、朝鮮のスポーツにとって困難な状況は今日もなお続いている。一九五三年に停戦協定が結ばれたが、停戦協定は一時的な「撃ち方止め」であり、アメリカとの緊迫した状態が続いている。

一九五〇年以來アメリカは朝鮮に対する経済制裁を続けており、スポーツ機材の輸入までさまざまな規制を受けている。朝鮮とアメリカとの間に平和協定が締結され、朝鮮半島における緊張状態が緩和し平和が訪れれば、朝鮮のスポーツはアジアの国々、世界の人々との親善交流にさらに多くの寄与をすることができると思う。

（べく、じょんおん／在日本朝鮮人体育連合会元会長）